

令和3年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(総合型選抜)

# 小 論 文

(地域学部 地域学科 人間形成コース)

(注 意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は4ページ、解答用紙は4枚、下書用紙は4枚である。  
指示があってから確認すること。
3. 解答は解答用紙(横書き)に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙又は問題冊子の余白を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子及び下書用紙は必ず持ち帰ること。

問題Ⅰ 次の英文を読んで、問1、問2に答えなさい。

The terms we use in talking about time—budgeting, investing, allocating, wasting—are borrowed from the language of finance. Consequently some people claim that our attitude toward time is colored by our peculiar capitalist heritage. It is true that the maxim “Time is money” was a favorite of that great apologist of capitalism, Benjamin Franklin, but the equation of the (1) two terms is certainly much older, and rooted in the common human experience, rather than in our culture alone. In fact it could be argued that it is money that gets its value from time, rather than the other way around. Money is simply the most generally used counter for measuring the time invested in doing or making something. (2) And we value money because to a certain extent it liberates us from the constraints of life by making it possible to have free time to do in it what we want.

注)

terms : 用語, budgeting : (予算などを) 割り当てる, investing : 投資する,  
allocating : (予算などを) 配分する, finance : 財政学, consequently : その結果,  
peculiar : 特有の, capitalist : 資本家・資本主義者, heritage : 遺産,  
apologist : 弁解者・擁護者, equation : 方程式, liberates : 解放する・自由にする,  
constraints : 束縛

Benjamin Franklin : アメリカの政治家でアメリカ合衆国の独立にも貢献した。避雷針などを発明した科学者としても有名で、合理主義者としても知られる。1790年没。

出典

Csikszentmihalyi, M. (1997). *Finding flow: The psychology of engagement with everyday life*, pp.8-9. Basic Books.

Republished with permission of Hachette Books Group, from  
Finding flow : the psychology of engagement with everyday life ,  
CSIKSZENTMIHALYI, MIHALY, 1998; permission conveyed  
through Copyright Clearance Center, Inc.

問1 下線(1)は具体的に何を指すのか、答えなさい。日本語でも英語でもよい。

問2 下線(2)を踏まえたうえで、教育とお金の関係について400字以内で論じなさい。

問題Ⅱ 次の文章を読んで、問1、問2に答えなさい。

### 現代の親子関係

ところで二歳前後の子どもの親からは「手に負えない」「子どもが言うことをきかず育児がしんどい」などの声をよく聞きます。一般書では「イヤイヤ期」などの言葉も見られますし、英語で“terrible two”（恐るべき二歳児）という言い方もあります。東京をはじめ東アジアの五つの都市で育児意識を調べた調査では、文化圏に関わらず、子どもが三歳頃は半数以上の母親が「育児の連続でくたくた」であると答えていました。この傾向は1980年代からあまり変わっていません。「第一反抗期」は親からの声を聞く限り以前と同様にあると言っているでしょう。

一方、小学校高学年から中学生くらいの年齢段階に対しては、「近頃の子どもは素直すぎる」「反抗期がないのは問題ではないか」などと懸念されることもあります。2016年に1万6千人を対象に行われた調査で、現代の若者はその親世代に比べ「反抗期がなかった」と答える者が多いという結果が示されました。ここでは15歳から29歳までの「子世代」と、中学生から29歳までの子どもがいる「親世代」の双方に反抗期があったかどうかをたずねているのですが、親世代では「反抗期と言える時期はなかった」と答えた者が男性28.1%、女性26.4%だったのに対し、子世代ではそれぞれ42.6%、35.6%と急増していました。

この調査では自分の親からどのような扱いを受けていたかについてもたずねています。それを見ると親から「ほめられる方が多かった」、あるいは「ほめる叱る同等」という人が子世代で増加し、「(ほめられるより)叱られる方が多かった」という選択肢は減少しています。ほめて育てる親子関係が多くなってきた印象です。ただしこの調査は過去のことを振り返って回答する形式ですので、慎重な解釈が必要です。

では実際に過去の思春期と現代の思春期を比較した調査ではどうなっているのでしょうか。

内閣府は平成18年(2006年)と26年(2014年)に無作為抽出した全国の小、中学生に対し同じ質問で調査を行いました。これを見ると親に「反発を感じる」者は小学生でも中学生でも減少しており、「気持ちをわかってくれる」親が増えていることがわかります(図1)。NHKでも同様に若者の生活や意識を探るため、こちらは中学生と高校生を対象に調査を行っています。1982年から2012年までの親に対する気持ちの変化を見てみると、やはり親は多少やさしくなる傾向が見られました。図2に示すように、父親についても母親についても、「やさしくあたたかい」「(自分のことを)よくわかってくれる」という質問に「そうだ」と答える中・高生はこの30年あまりで漸増しています。しかし「きびしいほうだ」との回答も2002年と2012年を比べると漸増しています。やさしくてよくわかってくれるけれど、厳しくないわけではない、ということなのでしょう。

さて、この調査では親にもさまざまな質問をしています。親自身が「こうありたい」と願う姿が大きく変化したわけではありません。「友だちのような親」でありたいか、それとも「権威のある親」でありたいかとたずねた結果は複雑な変化を示しています(図3)。2002

年と2012年を比較した限りでは、「友だちのような親」はむしろ減る傾向もみられました。2003年の時点でNHK放送文化研究所が分析した段階では「ぶつからない親子関係」が増加していると指摘されていますが、そこからさらに10年以上経った現在ではやや揺り戻しが来ているのかもしれませんが。

#### 時代や社会と共に変わる「良い親子関係」

こうしてみると、「第一反抗期」は依然として親を悩ませています。が、「第二反抗期」と言われる思春期の子どもに対しあたたかく受容する親が若干増えているとは言えそうです。

「反抗期が減っているのでは」という意見はこの思春期の時期を指していると言っているでしょう。思春期の「反抗期」減少の理由としては以下の点が考えられます。

第一に、「反抗期」という言葉が広く一般に使われ、多くの人がある意味を理解するようになったことが挙げられます。表面的な理解だけでなく、近年では思春期の脳の変化についての新しい研究もメディアで取り上げられるようになりました。子どもには発達の一過程として「反抗期」なる時期があるのだというコンセンサスは大きく、むやみに子どもを押さえつけるのではない対応の仕方がより望ましいという風潮があるように思えます。

第二に、児童虐待が大きく報じられるようになったことも影響していると思われます。児童虐待は1990年以前にはあまりメディアに現れることはありませんでした。しかし現在は増加の一途をたどり、毎年の統計が発表されるごとにニュースになり、残念な事件も後を絶ちません。こうしたことを反面教師として行きすぎたしつけや体罰を避け、おだやかに子どもと相対しようという流れができてきたのかもしれませんが。

最後に、現代の社会全体が「他者に価値などを強制しない、押しつけない」方向に向く傾向があり、それが子育てにも反映されているのではないかと考えられます。価値観が多様化する現代において、自分が正しいと思うことは他者にとっていつも正しいとは限りません。それは親子関係やしつけについても同様で、ひとつだけの確たる基準がない中で、親たちが懸命に模索しながら子育てを続けている結果が、思春期のわが子といたずらに対立せず冷静に向き合おうとするやり方なのではないでしょうか。

子どもの発達には生物としての変化だけではなく、その時々環境から大きな影響を受け進んでいきます。社会全体が単一の価値観で動くなど自由度が少ない場合は、親も社会に沿った単一の価値観を持って子どもに相対することが考えられますが、人間はそもそも多様ですから子どもは自分の意志や意欲を削がれることも多く、反発も大きいのではないかと考えられます。してみると、子どもをどうしても頭から押さえつけなければならない事態にはならず、多くの人がある程度に穏やかな親子関係が築ける社会というのは、社会が硬直しすぎていないという印なのかもしれません。

図1 子どもから親への気持ち (内閣府調査)

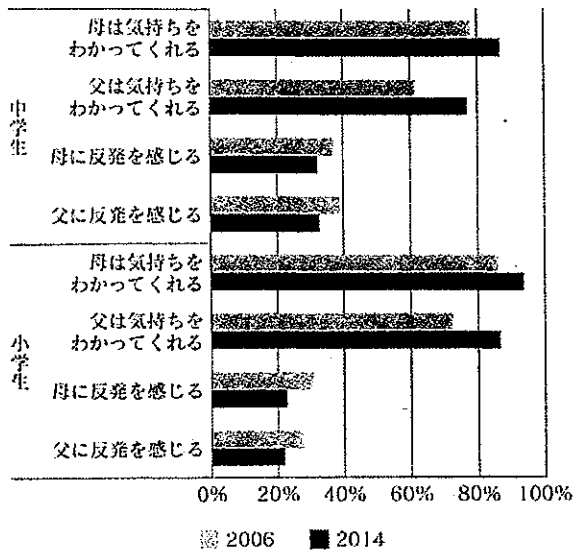


図2 子どもから親への気持ち (NHK調査)

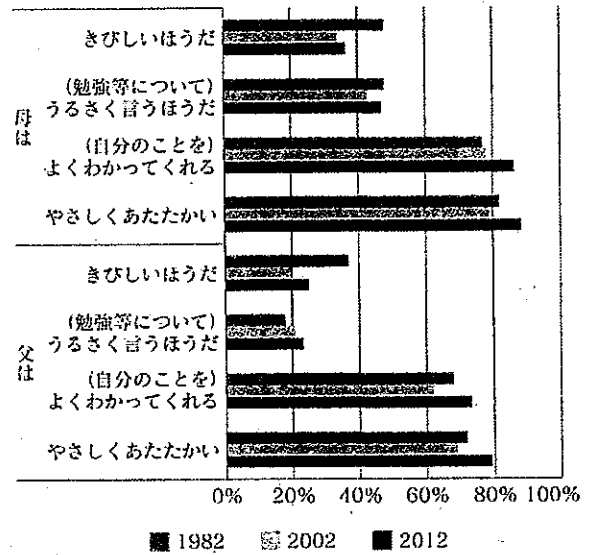
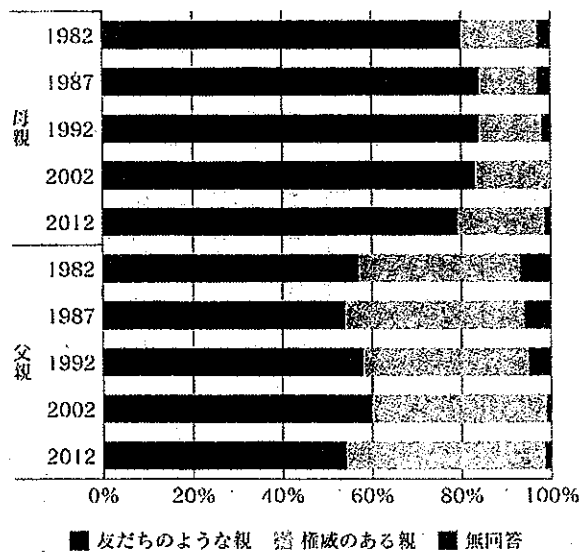


図3 親自身はどのような親でありたいか



〔出典〕戸田まり 「現代の親子関係にみる『反抗期』、『教育と医学』2018年12月号, pp.12-19.

問1 下線部「社会が硬直しすぎていないという印」とはどういうことか。「思春期」「反抗期」「親子関係」の3つの語句をすべて用いて300字以内で述べなさい。

問2 本文の内容を参考にしながら、「現代の親子関係」について、あなたの考えを600字以内で述べなさい。